

日曜日の休日、社会人一年目の彼は好意を抱く上司の小久保と宅呑みの最中だった。普段見ない私服であったので、酔いも手伝って彼の動悸は激しかった。スキニージーンズにオレンジのノースリーブニットで、普段の仕事で見る彼女とは異なるカジュアルな様子に、彼はすっかり見惚れていた。

「……あら？ 何を見てるの、後輩くん？」

挑発するような目つきを浮かべ、そう訊ねる小久保。

彼はすっかり慌ててしまい、要領の得ないことを口走ってしまう。小久保はそんな彼を上目遣いで眺めながら、焼酎のロックを口に運んだ。

「ねえ……ちよつと、こつち来ない？」

頬を朱色に染めながら、小久保はそう手招きをする。

彼は心臓を一層高鳴らせ、邪な妄想で頭をイッパイにしながら、彼はドギマギと小久保の傍へ近寄った。

「……うふふ」

妖艶な笑みを浮かべながら、小久保は見せつけるように片尻を上げる。

小久保のセクシーポーズに、ジーンズに浮かび上がるムッチリとしたお尻に、彼は釘付けだった。

「鼻、伸びてるわよ」

小久保にそう指摘され、慌てていやらしい顔を戻す。しかし、目はどうしても彼女の臀部に向かい、その体勢から『ある想像』をしてしまう。

そして、それを見抜いたように……。

「今、あなたが妄想してること、したげよっか」

挑発的な笑みを浮かべながら、小久保はそう言った。その言葉に思考を停止させた彼は、呆然とした表情で彼女を見た。

彼の『ある想像』を表すために、小久保はさらに尻を浮かせて目を細めた。

「……ん」

と軽く力み、小久保の尻がわずかに震えると共に――

ブッ！ ブッスウウ~~~~ッ！

空気の抜ける激しい音が室内に響き渡った。

一瞬、何の音か分からなかった彼であったが――

鼻元に漂う臭いが、音の正体を理解させた。

彼の鼻に漂ってきたのは、むう〜んと鼻腔を刺激する、肉々しい発酵臭だった。どこことなく甘ったるく、嗅いでいると頭がポーンとしてくるような魅惑の香氣……。

オナラだ。

憧れの上司が、自分の目の前で放屁したのだ。

その事実には啞然としてしていると、小久保はクスクスと悪戯っ子のような笑みを浮かべながら言う。

「ごめんなさい、オナラしちゃった♪」

そう舌を出し、手を合わせて謝る小久保。放屁した恥ずかしさも、気まずさもないようだった。彼女が故意に放屁したのは間違いなかった。

彼の動悸は頭に響くほどに激しくなり、鼻に流れ込む屁の香りが性的興奮を煽る。小久保の尻に顔を押しつけてオナラの臭いを嗅ぐ妄想が、自然と脳裏を巡り、彼の股間に大きなテントを張らせた。

だが、この事実を小久保に知られるわけにはいかない彼は、彼女の放屁を茶化すように笑った。

しかし、小久保には全てお見通しのようで……。

「こっさいうの、好きなんでしょう？」

彼の額に冷や汗が滲む。

「女の人がオナラするのに、興奮しちゃうんだよね？」

一気に核心をついてくる小久保に、彼は目を泳がせるしかなかった。

「さっきね、あなたがトイレ行ってる間に、こっさりね、パソコン見ちゃったの」
フフフ——と楽しそうに笑って。

「ダメだよ、履歴はちゃんと消さなきゃ」

その言葉に、彼は急速に体温が下がるように感じた。

自分のアダルトサイト巡回の記録を見られたのだと、悟ったからだ。

オナラフェチ御用達の、数々のサイトを——

頭が真っ白になり、何も言えず固まる彼に、引き続き挑発的な笑みを見せながら——小久保は彼の股間に触れる。

「あ、ホントに勃ってる〜」

オナラによってカチカチに勃起したペニスをズボン越しに触れながら、小久保はそう楽しげに言う。撫でさするように、彼の陰茎を刺激した。

憧れの女性にペニスを弄られ——

気持ちよさに情けない声を漏らし、体をピクピク震わせた。

「すごいね、オナラで本当に興奮しちゃうんだ〜。オナラの臭い、好きなの？」

そう楽しそうに訊ねる小久保に、恥ずかしさから彼は首を横に振った。

「ええ〜、ウソはよくないな〜」

彼の体に手を這わせ、顔を近づける小久保。キスができるほどのその距離感に、

彼は目眩を催した。

「しい〜」

彼の唇に人差し指を当て、小久保は目を細めた。

「……んう」

プウ~~~~ッ！ バスッ！ プレモイ~~~~ッ！

ジーンズに籠もるような音が三発、強烈な空砲が放たれた。

再びの放屁に、彼の本能は逃れられない。放屁に興奮する様子を、如実に表してしまった。

「……鼻息、荒くなっちゃったね。しかも、チンチンぴくってなった」

彼の如実な反応に、してやったりといった微笑みを浮かべる。

「好き、なんだね？ オナラ」

もう観念するしかなかった。彼は力なく頷いた。

「ヘンタイだね、こんなのが好きなんて」

口角を吊り上げながらそう言うと、小久保は可愛らしい小鼻を慣らした。

「んう、くっさあ〜い。ひどいニオイだね、私のオナラ」

小久保はそう言って、ほんの少しだけ恥ずかしそうに笑った。

小久保のオナラは一般的な感性からすれば、間違いなく『クサイ』ものだった。おそらく、彼女の無類の肉好き由縁の、強烈な腐肉臭をベースに、オナラ特有の硫黄の香りや妙に生々しい生臭さがブレンドされ、鼻の曲がるような臭いが形成されていた。一般人が嗅げば、間違いなく顔をしかめるだろうし、美人な彼女を幻滅の対象とするであろう悪臭だ。

しかし、彼にとってこれら放屁臭は得も言われぬ芳香だった。もちろん、臭いから良いというわけではない。憧れの女性からこんなにも強烈な臭いが放たれるという事実には、彼は性的興奮を覚えるのだ。

オナラフェチだと露見した彼は、もはや体裁も気にせず空気中に漂う屁成分を吸収した。

「んう〜……ちょっと嗅ぎ過ぎ、だよ？」

自分の恥ずかしい臭いを堂々と臭われるのはさすがに恥ずかしいのか、小久保は顔を赤く染めながらそう言った。その魅力的な仕草に、彼はますます興奮を募らせていった。

抱きつくように体を寄せ、服越しにカリカリと乳首を弄りながら、小久保は訊ねる。

「ねえ……お尻に顔埋めて、オナラ嗅ぎたい？」

それは願ってもない提案で、彼は乳首責めの気持ちよさに涎を垂らしながら、うんうんと頷いた。

「ふうん、そうなんだ」

意地悪な表情を浮かべて、小久保は言う。

「でも、さっきウソついてたしなく、どうしよっかな……」

小久保は彼の方を向いたままお尻を上げ、魅了するように左右に振りながらふうふうと尻を鳴らした。その動作にさらに興奮し、本能に支配された彼は、ごめんなさいと謝って許しを乞うた。

「んん、そんなんじゃダメかな」

くすくすと微笑みながら小久保は告げる。

「私は小久保さんのオナラが大好きでちゅ。くっちゃいふうふう、いっぱい嗅がせてください……って言ってくれたらいいよ」

あまりに恥ずかしいその台詞に、彼は耳を疑う。まさか、本当にそんなことを言わせるつもりなのか、と彼は小久保の様子を伺った。

しかし、どうやら本当らしい。

「イヤなら別にいいんだけどなく、私はどっちでもいいし」

そう言いながら、小久保は彼を押し倒し、顔の横に手をつけて覆い被さる。

薄らと細めた挑発的な目つきが、彼の心を捕らえて離さない。

「ほら、早く言っちゃった方がいいよ。でないとう……」

小久保は顔を近づけ、少しだけ眉をひそめて力んだ。

「……んぐっ」

ブズッ！ ブピッブフウ~~~~~ッ！

本日何度めかの快音が鳴り響く。

またもや小久保が放屁したのだ。

「あなたのだ〜いすきなオナラ、このまま全部漏らしちゃうからね〜。お酒で発酵した極上のオナラ、嗅ぎ漏らしちゃっていいのかな〜？」

そうくすくすと微笑むと、小久保は彼の胸に頭を寄せ、彼にも見えるほどに尻を上げた。そして――

「……んぐっ」

ブフウッ！ ブフウ~~~~~ッブフウ~~~~~ッ！

